学校法人 福島成蹊学園
福島成蹊中学校･高等学校
令和５年 12 月 15 日　NO.17
文責　高校２学年主任　赤井田　亮彦

一 貫 コ ー ス 通 信

カブトムシの飼育から考える

カブトムシといえば，夏を象徴する昆虫ではあるが，実は冬に入るこの時期がカブトムシにとって重要な季節である。カブトムシは今の時期，幼虫として地中で生活している。12 月以降の寒さが本格化するこの時期から冬眠し，来年の春（4 月～5 月）にまた活動を始める。

昨年の夏，小学生の息子（当時は保育園児であったが）と市内の山へカブトムシを採取しに出向き，カブトムシのオスとメスを手に入れた。その後，同じ虫かごで飼育していたカブトムシのペアは，昨年の初秋に天寿を全うすることとなったが，その虫かごには 20 個ほどの卵が産卵されていた。私自身もカブトムシを卵から飼育した経験はなかったが，子どもの頃，昆虫図鑑に載っていたカブトムシの成長の写真に憧れていたこともあり，卵から飼育してみようと思い，急遽，飼育の仕方を調べて取り組むことにした。

カブトムシの幼虫は，卵から孵化した直後の１令幼虫から，脱皮し２令幼虫へと大きくなっていく。冬眠に入るこの時期には 3 令幼虫となり，長い冬眠に備えるのである。もちろん段階が上がるにつれて，幼虫の大きさも指先大であったものが，３令幼虫となると，手のひら大にまで成長する。大きな幼虫を飼育するためには，幼虫の住環境も重要で，餌となる腐葉土をたくさん食べることができなければ，大きく成長することができないのである。そのため，幼虫を飼育するための大きいサイズの虫かごを複数用意し，１つの虫かごに５～6 匹ほどの幼虫を入れて飼育をした。食欲が旺盛で，虫かご内の腐葉土を冬までに何度か入れ替え，冬眠させ，無事，18 匹のカブトムシを成虫にさせることに成功したのである。

成虫となったカブトムシたちの大きさを見てみると，大きさはまちまちであり，色つやもそれぞれに個性があった。特に，大きさについては，冬眠前までに大きくなっていた幼虫たちは成虫の姿も大きく，元気に毎晩のように虫かご内を飛び回っていた。しかし，小さい個体は，冬眠前の大きさもそれほどであり，成虫になっても元気がない。なかなか餌にありつけないためか，日に日に弱っていってしまったのである。小さい個体を，別の虫かごで飼育したものの，餌もあまり食べず，長く生きることができなかった。

このことを考えると，自然界のカブトムシも今，冬眠へ向けて準備をしている最中であると思うが，この時期にたくさん餌を食べ，幼虫のうちに大きく体を成長させることが，来年の夏，成虫として活動するときに重要になってくるのである。普段の生活からは見ることのない地中での生物の活動が，後の季節に主役となるのかどうかを決定しているのである。

われわれ人間も，カブトムシと同じように小さな赤ちゃんの時期を経て，大人になっていく。その過程で，幼児期・小学生・中学生・高校生・大学生…と様々な経験を積み上げて，個性豊かな大人が形成されていく。私もそうであったが，子供時代の様々な経験から今のアイデンティティ（すべてとは言わないが）が形成されている。子供時代の経験は様々で，楽しい経験もたくさんあれば，苦境に立たされた経験，大いに失敗した経験など挙げればキリがないほどである。その一つ一つが大切な思い出であり，自分を大きく成長させてくれたと思う。

今，中学生・高校生という重要な時期を過ごしているみなさんにも，自分を成長させてくれた経験があるのだと思う。そして，これから大人になるまでにたくさんの経験を積んでいくことが予想される。自分もそうであったが，今経験していることが将来どのような形（自分のアイデンティティ）になるかは，その時点では全く想像できないだろう。大人になった今だからこそ，その頃を振り返り，重要な経験であったのかどうかが何となくわかるようになっている。成長中の真っただ中にいる中学生・高校生には，好き嫌いをせずに様々なことにチャレンジしてほしいと心から願っている。その豊富な経験こそが，次の時代の主役となるために必要なことなのだと信じているからである。